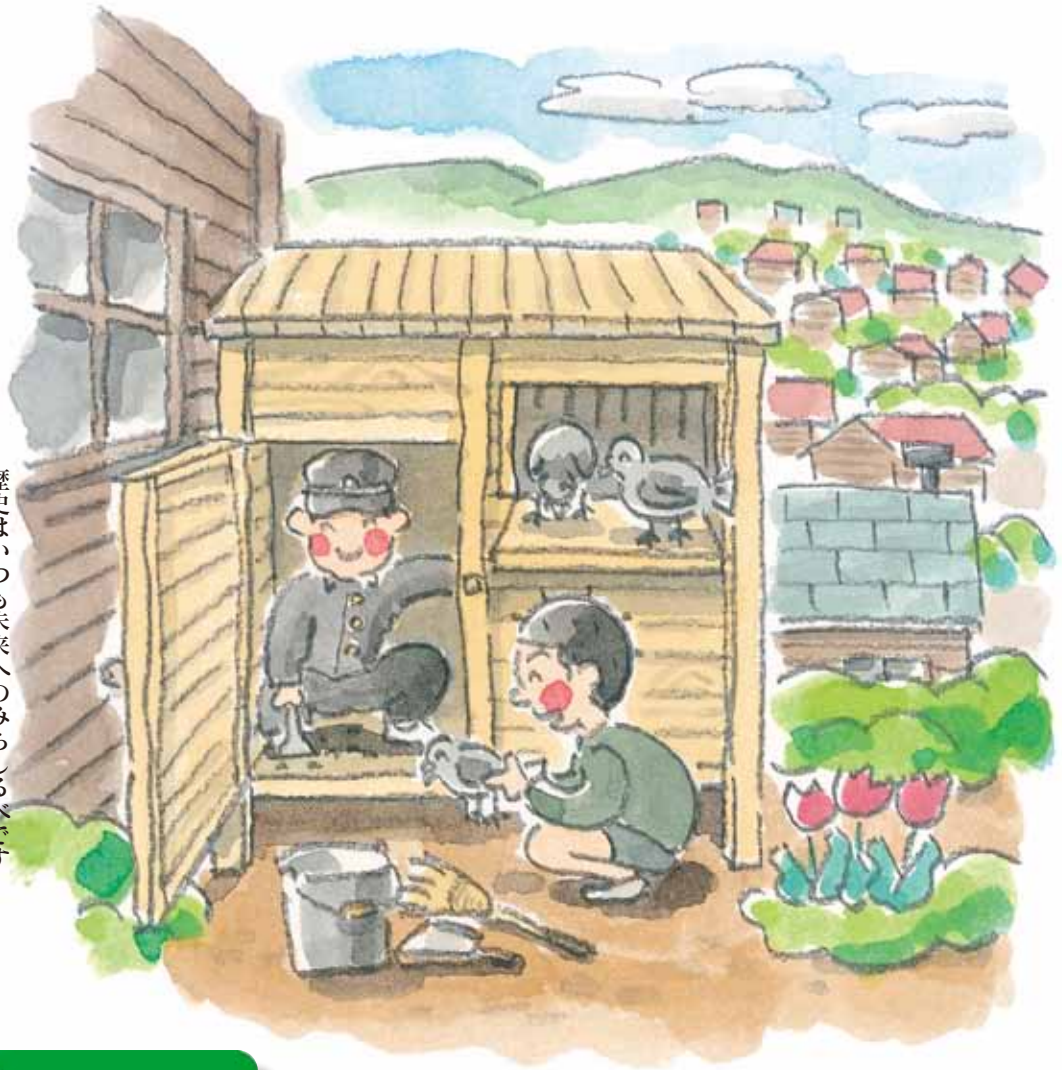


語り継ぐ、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです  
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが  
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら  
いつか来た道まで戻ってみましょう



ひと街にごと No. 31

ハトを飼っていたころ

道端で拾ってきた犬を飼うというて親にしかられた高度成長時代。近所にハトをたくさん飼っている家がありました。昭和四十年ころは伝書バトレースが最も盛んで、全国で数百万羽の登録があったとか。東京オリンピックの開会式でも無数のハトが放たれました。隣のハトがレースに出ていたのかは覚えていませんが、一定の時間になると一羽、二羽と小屋に帰ってくるのが不思議でした。近年、レースがかつてほど盛んでないのは、ハトがレース中に全滅するなど帰還率の低下していることも原因だそうです。都心で厄介者扱いされているハトは元気のようなのですが。

- ・時の街角／旧山本理髪店—— 2
- ・マチの博物館／九谷陶楽—— 3
- ・あるばむレトロポリス／円山の花見—— 4
- ・川筋を行く／豊平川—— 5
- ・来た道行く道／一心堂—— 6
- ・道具で道草30年—— 7
- ・時計のある風景—— 8

二〇一〇年 春 年四回発行

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目  
TEL(011)561-1597

編集：ひと街にごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産会館四階  
(編)編集工房海内 TEL(011)633-1651



## 時の街角

北海道開拓の村から

マンションにはさまれて営業していたり、いつの間にか廃業していたり——床屋さんもまた、時代の荒波を乗り切るのは大変のようです。かつてはこんなたずまいだったというその見本のような建物です。

# “床屋のハイカラ” 細かい意匠で表す。

旧山本理髪店——大正末期建築

「札幌事始」（さつぽろ文庫7）に  
よりますと、札幌の理髪店の第一号  
は明治六、七年（一八七三、四）こ  
ろ、岩手県出身の中村重兵衛という  
人が南一西一で屋台の髪結業を営ん

でいたのが最初とか。明治四年に断  
髪令が出たばかりですから、新しい  
物を取り入れるのが早い北海道  
のようですが、やはり本州と同様す  
ぐにマゲを落とすにはいたらず、明  
治十二年（一八七九）、開拓使の理  
髪改善の号令による理髪店が南一西  
四に開店しています。

ここで紹介する山本理髪店の開業  
がいつかはつきりしていませんが、  
北海道開拓の村の、諸文献からの推  
定は大正末期。旧所在地である札幌  
市中央区南一西二十四（札幌郡藻岩  
村大字円山村）に、後の所有者は代  
わっているものの最初から理髪店と  
して使用された建物だそうです。  
札幌市内の旧市街地を探せばまだ

どこかに残っているような、懐かしい  
たたずまいです。「北海道開拓の村  
整備事業のあゆみ」（一九九二）で  
は、その特徴を「外観は傾斜の急な  
切妻屋根、妻軒の棟折れマンサード、  
妻壁のハーフトインバー、化粧ブラ  
ケットとガラス戸の組子で飾られた  
二階中央の出窓、これらをとりにま



ま、下見の外壁、玄関の雨よけアーチ  
など」が大正時代の特徴を残す、ス  
マートな小建築と述べています。

マンサード屋根はかつて札幌でも  
よく見られました。屋根裏部屋を設  
置するために屋根こう配を二段に  
折って高くしたのですが、ここで  
は妻軒に応用しています。ハーフ  
ティンバーとは柱や梁などを壁に露  
出する装飾の一つ。またブラケット  
は出窓の出っ張りを受けている三角  
形の部分。外壁の下見板張りは北海  
道の和洋折衷の定番です。

なるほど、小さいながらも細かい  
意匠であることです。建築当時、す  
でに女性のヘアアイロンやパーマ



ネットが日本でも広がっており、理  
容・美容の仕事もハイカラの先端を  
いつていたのかもしれない。

建物もさることながら、大正期の  
理髪店を再現したという店内調度、  
器具類にも懐かしいものがあります  
ので、年配の方にはお勧めです。

板張りのフロア、理容道具の収納  
古き良き時代の床屋はこんなだった——  
客と店主の会話が聞こえてきそう

何よりも白く塗られた外壁が洋風を象徴している  
妻壁の梁の露出も一般の民家にはあまり見られない意匠

※参考文献 北海道開拓の村・開村10周年記念誌

美術館と呼んだほうがぴったりするくらい、古くからの商業の街で静かに光をともし続ける老舗道産子にもなじみの深い九谷焼の数々、いつの時代にあってもその存在感は不変です

## 眺めて、使って――

# 九谷焼で心にゆとりを。

豊平川を渡って国道三六号線を東へ少し進んだあたり。両側の商店にかつての賑わいはありませんが、その一画の引っ込んだ場所に「九谷陶栄」の看板です。

店主は山崎仁さん（八二）、倫子さん夫妻。仁さんはこちらで創業八十年以上という麩製産会社の社長で、先代が石川県出身。倫子さんの実家も九谷焼の窯元で、加賀藩お抱え窯の家柄。若手作家を

育てながら広く販売も手がけるなど、九谷焼の振興発展に努めています。

北海道と石川県のつながりは深く、実家でも早くから道内で展示会を開催していたところ、ここを拠点に夫婦二人で楽しみながらやっています。

（二九六五）に開店しました。ご両人ともいわば生まれた時から九谷焼と接しているのですから、造詣の深いことは言うまでもありません。その歴史や特徴についてはお店での話に譲りましょう。九谷

焼といえば緑や青を多用したものの印象が強い人もいますが、赤、黄、緑、青、紫の、いわゆる「九谷五彩」による華麗な上絵で知られます。古九谷木米、吉田屋、飯田屋、庄三、永楽といった異なる画風のあることを教われば、九谷焼への興味がさらに深まること請け合いです。

語れば尽きないその魅力。「世界の名陶といわれる伝統工芸です。古九谷の美しさがあるからこそ、それに感動して若い作家が誕生し、伝統を守っているのです」と仁さん。倫子さんも「加賀の料亭では料理を見て楽しみ、食べて楽しみ、そして器を見て楽しむという素晴らしい」と言います。

「実家に良い作品が焼き上がったと聞いたらすぐに飛んできます」という倫子さん。九谷焼を広めていきたいという情熱が店を支えています。



古九谷・赤絵の皿。こんな器で食べれば味もまた格別



美術館さながらの九谷焼の数々

## 夫婦で店を構えて45年、造詣も深く



山崎仁さん 倫子さん夫妻

焼といえは緑や青を多用したものの印象が強い人もいますが、赤、黄、緑、青、紫の、いわゆる「九谷五彩」による華麗な上絵で知られます。古九谷木米、吉田屋、飯田屋、庄三、永楽といった異なる画風のあることを教われば、九谷焼への興味がさらに深まること請け合いです。

語れば尽きないその魅力。「世界の名陶といわれる伝統工芸です。古九谷の美しさがあるからこそ、それに感動して若い作家が誕生し、伝統を守っているのです」と仁さん。倫子さんも「加賀の料亭では料理を見て楽しみ、食べて楽しみ、そして器を見て楽しむという素晴らしい」と言います。

「実家に良い作品が焼き上がったと聞いたらすぐに飛んできます」という倫子さん。九谷焼を広めていきたいという情熱が店を支えています。



手前は菓子鉢の展示



同じ九谷焼でも現代風の湯呑み



国道三六号に面している店舗



日本画のような銀彩の花柄の壺

陶磁器の専門店が少なく、北・北海道では唯一の九谷焼専門店です。一千点以上の作品が並んでいます。陶磁器の専門店が少なく、北・北海道では唯一の九谷焼専門店です。一千点以上の作品が並んでいます。

札幌市内随一の桜の名所  
円山公園(札幌市提供)



## あるばお レトロポリス

### 円山の花見

道産子には特別な思いがある春という季節  
それは四季のうち一つではなく、長い冬の次に来る季節  
だからこんなに浮かれたくもなりませんよ、花見！  
今年はどうな咲き具合でしょうか、ぶらり円山へ

# 明治のころから大賑わい 市電の特別輸送もあった。

上／大正九年。芸者衆の三味線と踊りが見える  
中／昭和十年。神宮の参道には長い桜並木が続いている  
下／昭和四十九年。へ左下も含む五枚は札幌市写真ライブラリー提供



たくさんの人出、紅白の幕を張っての宴(昭和34年)

円山の花見はすいぶん古くからの  
年中行事だったようで、札幌近郊の  
たくさんの人たちが訪れるように  
なったのは明治十年代末。開花を待  
ちわびたように三分咲きのころから  
足を運んだとか。

北海道神宮境内に千本、円山公園  
に千五百本ほどある桜。最初に植え  
られたのは明治八年(一八七五)の  
こと。前年、札幌の街づくりの祖と  
いわれる島義勇開拓判官が佐賀の乱  
で破れて処刑されたのを悼み、元従  
者の福玉仙吉という人がその供養に  
と、札幌神社の参道に百五十本の桜  
を植えたのが始まりだそうです。

昭和初期の写真にはまだ、正面の  
拜殿に続く道に見事な桜並木が写っ  
ています。しかし、枯れていく木も  
多く、境内などに後から植えてきた  
ものが現在の花見の名所をかたちづ  
くってきました。

その賑わいぶりは、ヨーヨーや綿

あめ、あるいは茶店などたくさん  
の出店が並んだ時代を覚えている人も  
多いことでしょう。そんな人出を象  
徴するのが市電の花見特別輸送体制  
でした。

「四丁目三越前電停は、札幌全市  
から市電やバスを乗り換えてきた家  
族づれ、会社関係の団体、さらに  
札幌駅経由の近郊から花見客が集  
中し、四丁目一帯は人の山となる」  
(さっぽろ文庫22・市電物語)。とい  
うわけで、市電をこ

の一条線に集中的に  
配備。車庫には一台  
の予備もなかったそ  
うです。往復の混雑、  
車内の酔客の喧騒、  
途中から乗れない市  
民の苦情——一週間の  
大フィーバーでし  
た。

やがて暮らしが向



開花は四月下旬から五月上旬(札幌市提供)



昭和五十七年。昔より人出は減ったものの今と変わらない風景

# 豊平川 完

さつぽろの水

## 地下深く流れる「大河」 水道水のおいしき屈指。

全国でも指折りといわれる札幌の水のおいしさその理由は水源が支笏湖近くの山奥だからそして都心部が扇状地に形成されているから地下を流れる「大河」の恵みも貴重です。たまには札幌の水の味を確認してみましょう

定山溪など南西方向に連なる山々を背景になだらかな傾斜地に形成された市街地――

その中心である札幌駅のあたり  
の標高が二〇㍉。一方、真駒内の

札幌の地形は、テレビ塔かJRタワーに上れば、ひと目でわかります。

## 川筋を行く

人と川の様々なかかわりを見ずねて

はそのほとんどが姿を消していますが、名残は見る事ができます。さつと挙げてみて道庁、北大植物園、知事公館、北大構内などいずれも市民の憩いの場。中でも北大構内のサクシユクト二川は、かつては南側の



豊平川をまたいで水道管橋を上水が流れる

豊平川さけ科学館の場所  
で標高八〇㍉。都心部は、豊平川が運んできた土砂で形成された扇状地なのです。土砂と一緒に上流から運ばれてきた豊富な栄養が畑作に適した土壌もつくったことは、平岸地区で盛んだった果樹栽培に代表されています。

そしてもう一つ、札幌駅一帯がその扇状地の北端であることを示す事実は、地下水の湧き出ている場所の多いこと。といっても今で

偕楽園（清華亭）や伊藤邸に湧くメムを水源としており、日本海からは新川を伝ってサケが上ってきたほどの清流でした。メムというのはアイヌ民族が湧き水をこう呼んだもので、その周りに集落もできていきました。

大きなメムは枯れても、今なお伏流水は地下深く流れています。札幌の地酒、千歳鶴では、豊平川近くの地下百五十㍉から汲み上げて清酒づくりに使っています。このほか工場やビルでも地下水を

## 札幌市水道記念館 上水道の仕組み学ぶ。

札幌市の上水道の仕組みがよくわかるのが水道記念館。札幌市街を一望する場所に、藻岩浄水場と並んで建っています。そもそも昭和十二年（一九三七）に建てられた札幌市最初の浄水場、旧藻岩第一浄水場の建物の一部で、昭和四十六年まではここから水道水が供給されてきました。

内部は水源の森、水工場、アクアラインなど五つのゾーンに分かれたアクアミュージアムを中心に、水道記念室、水の図書館などがあります。中でも水工場は、水道水が各戸に届くまでの様子を楽しみながら学べます。ロープウェイ入口から西へ五百メートルほど行ったところから坂を上って。入館無料。十一月まで開館。

※所在地／札幌市中央区伏見四丁目



水のミュージアム。レンガ造の外観も印象的



使っているところがありますし、ビール工場や乳業会社の立地も伏流水と無縁ではありません。札幌の食べ物や飲み物がおいしいのは、こうした地下水や良質の上水に負うところが大きいでしょう。



さて、毎日飲んでいる札幌の水ですが、たまにはじっくりと味わってみませんか。全国屈指の人氣という水道水、ペットボトル入りの「さつぽろの水」のことで。水源に近い定山溪浄水場で処理した水を、恵庭市内にある工場場で塩素を除去し、加熱処理しています。市販のミネラルウォーターとどちらがおいしいか、お試しを。



これが「さつぽろの水」  
一本百円。区役所などで販売中

# 来た道、 行く道。

様々な先達がいるからこそ  
二十一世紀があるんだよ——  
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦、他薦を  
お待ちしております。

かつては日本人の生活に密着していた表具。表具とは掛け軸、屏風、襖、衝立、額など、布や紙などを張ることによって仕立てられた物の総称です。書画の保存と鑑賞のために、縁取りや裏打ちをする表装とも切り離せません。

昭和二年（一九二七）創業という一心堂の柄澤光昌さん（五）は、道内でも数少ないこの表具師の二代目。北海道表具内装業協同組合の専務理事でもあり、昨年、北海道産業界貢献賞を受賞しています。

同組合員の仕事は表具と内装に大別されますが、従来は和紙で行っていた襖や障子、壁紙といった内装が、昭和三十年ころ



和紙を張る時に使う  
様々な動物の刷毛  
すべて特注したもの



から、機械で裏打ちされた布クロスやビニールクロスなどになりました。それと平行しての住まいの洋風化、和室の減少で、掛け軸など伝統的な装飾品を手がける職人も少なくなっていたという歴史的な経過があります。

柄澤さんの仕事も内装が大きなウエイトを占めてはいますが、「表具もクロスも紙を扱う点では同じ」（柄澤さん）というのは、機械によるとはいえ布クロスやビニールクロスにも紙で裏打ちされて



表具内装業組合の全国大会で出展した現代感覚の掛け軸。息子の利昌さんの書「光」との合作。右は白い和紙を裏打ちした裂地を裁つ作業



有限会社 一心堂  
札幌市中央区南14条西9丁目3-44  
TEL (011) 511-0363

形式を重んじるものから自由な発想の表具まで親子の試みの作品



いるからこそ。継ぎ目も見えず絵柄に一つのズレもなく張るといふ、職人本来の技術があるからです。

内装の傍ら柄澤さんが取り組んでいる

## 内装仕事が増えても 親子で目指す 現代感覚の表具。

柄澤光昌さん——札幌市中央区・一心堂



のが、傷んだ掛け軸や屏風の修復、そして新たな書や日本画の表装です。長年にわたって講師を務めているNHKカルチャー教室にも、受講者が絶えません。

その仕事の工程をざっと教えていただく、例えば書を新しく掛け軸に仕立てる場合は、まずその作品に合った裂地（布）と裏打ちする和紙を選ぶことに始まります。どちらもその数は千種類を超えるといえますから、「納得のいく作品は年に一度あるかないか」。

次の作業が作品と裁断した裂地への裏

打ち——糊を塗って和紙を張っていきます。この段階でも糊の濃淡、刷毛の選択に経験がものを言います。続いてそれらの一ミリのズレも許されない張り合わせ。何百年も前に制作された掛け軸などが今日、傷みもなく残っているのも、こうした優れた表装が施されているからです。

和室や床の間がなくなつて、将来に柄澤さんが夢を託すのが現代表具。形式にとられない室内装飾として、新感覚の掛け軸や衝立を生かせないかと、息子の利昌さん（三）の書との合作を試みている昨今です。利昌さんはサラリーマンを経て父親に入門。表装の仕事を見習いながら持ち前のセンスで、若い人にも人気の「アート書道」の腕を磨いているところだ。



表装用の裂地の数々

一連の作品が、心のゆとりがなくなつた時代に受け入れられれば、新しい表具師の登場も近いことでしょう。

# 道具で

## 道草30年

かつては趣味でカラー写真を現像していたという筆者  
ふと立ち寄った裸婦画の個展での無断撮影から画家との交流が始まった  
東京から札幌に帰ってきたばかりで、四十一、二歳のころの話した

### 坂一敬

# 今は亡き裸婦画家は、 写真の大先輩だった。

その日、札幌駅から三越の方に向かって歩いていた。左側に時計台ギャラリーというのがあるのは知っていたが、まだ入ったことは無かった。それで立ち寄ってみることにした。中に入ってみると三室すべてを借りて、宮田清さんという人の個展をやっていた。とても素晴らしい裸婦の展覧会で、私はすっかり魅せられてしまった。会場には二時間はいたと思う。日程を見ると明日で終わりでそこで私は翌日、カメラを持って再度訪れ、絵をカメラに収めていった。

三分の二ぐらい撮り終えたころ、小柄なおじいさんが寄って来て「よく撮れますか？」と聞いて来た。私「ええ、まあ。」そしてフィルムを四本使って会場を去ろうとした時、先ほどのおじいさんを囲んで、みんなが「先生、先生」と言っている声が耳に入ってきた。

それで私は初めて、先ほど声をかけてきた人がこの個展の主、宮田清さんだと気づいたのであった。このままでは帰れない。私はみんなが集まっているテーブルのところ近づき、宮田さんに、断りもせず写真を撮ったことを詫び、近々写真をプリントしてお宅に持っていきたい旨を

述べ、住所を聞いて会場を後にした。(その後、沢山の個展の会場を訪れたけれど、カメラに収めたいような作品に出会ったことは無い。また、現在レトロスペースを訪れてくれるお客さんの写真撮影をフリーにしているのも、きつとこの時のことがあるからだろうと思う。宮田さんは「どうぞ」と言っただけで、それは一切言わなかったのだから。)

フィルムはラボに出そうかと一瞬思ったのだけれど、それではあまりに芸が無い。寝る時間を削れば済むことと思ひ、自分で暗室にこもることにした。翌日、宮田さんに写真があがったので届けに行きたい旨をつたえ、

「いつでも」という答え。初めてのところなので車で行くことにした。

宮田さんは上機嫌だった。というのは私が写真を持ってくるか否か、

マサちゃん(宮田さんの奥さん)と賭けをしていたそう、マサちゃんは今まで沢山の人が同じ言葉を残していた。だから私も同じ、持った人はいかに賭け、宮田さんは、あの人は必ず持つてくるほうに賭けたそう。(あとから聞いた話)

写真を見ながら「ゆうべは徹夜ですか？」と聞いてきた。(当時カラーのプリントはまだ自動化されていなかった、ラボに出すと早くても四日はかかった)「いえ、車で来ましたから、短いです



在りし日の宮田画伯と筆者

「でも時間を短くするため、フィルムの背を台わせて二本同時にタンクに巻き込み現像液を入れて現像しました。水洗いも普段は流水で一時間はかけるのですが、水洗い促進剤を使って、手早く済ませました。」私の説明に宮田さんはすぐに反応する。おじいさんだけれど、写真には詳しい。後から知った。

宮田さんは、なんと小学校の頃より写真の現像をやり、八ミリの前の九ミリ半も現像は自分でやり(場所を取るのを乾燥は大変だった)ので、新しいカメラが出ると、家のものを賣り入れても買ったところで、マサちゃん曰く電話機も買入れしたことがあるとか。

だから二人の会話ははずみにはずんで、あつという間にお昼になってしまった。

すると宮田さんは電話をとって「うな重三つ」と注文した。地続きの隣が「二葉」という鰻屋さんだった。(あとで有名になるあの「二葉」で、当時は家族だけでこじんまりやっております、暇な時には宮田さんのところに油を売りにきていた。うな重は抜群においしかった。当時札幌一といわれる店の品を越える味だった。全て自分のところで育てた鰻を使っているとか。)

写真の話で盛り上がり、夕方、私がおいとますると言うと、宮田さんは私を画室に案内した。沢山の作品が並んでいた。どれか気に入ったのがあるかと聞く。「夢」と題する五〇号くらいの一枚にとっても心引かれた。そう言う「では持つて行け」と言う。三菱のランサーに乗って来たことに感謝した。宮田さんの気が変わらないうちに心の片隅で思い「夢」を車に積んでお宅を後にした。これが私と宮田さんの付き合ひの始まりである。

※宮田清/明治二十二年(一八八九)昭和六十一年頃(一九八六頃。没年不詳。札幌生れ。札幌一中(現札幌南高)を経て上京。太平洋画会研究所に入り、中原悌二郎と親交。寂しげな独特の裸婦像を確立。

レトロスペース坂会館・館長(坂栄養食品開発部長)

# モニュメントに削ぎ落したものは……。

何かに追いついてられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

札幌駅前通りのいくつかのビルの玄関先にあった時刻表示が、最近ではほとんど見られなくなりました。人は忙しい時ほど時間が気になるとすれば、もはやかつての忙しさも幻となったというこのようです。この高い時計塔も朝のラッシュ時に信

号待ちする人たちが見上げたことでしょうが、その形からしてモニュメントとしての役割のほうが大きかったのかもしれない。仮にそうなら、心を和ませたいという制作意図に反して、むしろ削ぎ落したものが、次の時代を予測していたかのようです。



## Now Printing

●本づくりのパートナー  
(社)印刷紙工

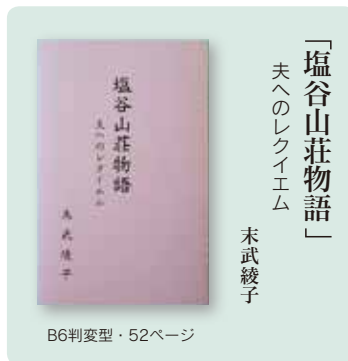
**居間で本づくりセミナーを**  
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただけます。日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いいたします。ご自宅の居間でも結構です。もちろん無料です。

**記念誌は未来への道しるべ**  
企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十周年と歴史を重ねていく度にその歩

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきます。未来への道しるべ、歴史はきちんとまとめておきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

**小紙を無料で差し上げています**  
慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。

**つくってみませんか**  
句集・歌集・詩集・小説・随筆集・自伝・体験記・回想集・画集・写真集



筆者の夫は道内でも数少ない能面師（面打ち師）でしたが、平成20年（2008）3月に不帰の人となりました。ともに高校教師であり、歌誌「原始

林」同人でもある筆者の「夫へのレクイエム」ですが、二人で過ごした日々が簡潔にまとめられています。

能面師・末武行雄という人は、定年の3年前に道内の高校での職を辞し、神戸に赴いて面打ちを始めています。小樽市塩谷では山荘を構えて教室も開くほどでしたから、いかに濃密な日々だったことか。筆者の抑制された筆致が失ったものの大きさを物語っています。

能面師の妻と呼ばれる如くなり少しさみしく我は老いゆく

B6判変型のわずか52ページという本にも拘わらず、これ以上も以下もないと思われる内容です。電子書籍の時代の到来といわれますが、機械による端末では到底表現できない、まだまだ紙の本の可能性を感じさせてくれます。